



TITLE:

# ハイデガー哲学における歴史理解 ：所与性の再経験としての歴史( Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

酒詰, 悠太

---

CITATION:

酒詰, 悠太. ハイデガー哲学における歴史理解：所与性の再経験としての歴史. 京都大学, 2018, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2018-05-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21279>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

( 続紙 1 )

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	酒詰 悠太
論文題目	ハイデガー哲学における歴史理解：所与性の再経験としての歴史		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文の目的は、一九二〇年代初頭から一九三〇年にかけてのハイデガーの歴史理解を明らかにすることである。結論を予め先取りするならば、その歴史理解とは、所与的事態の批判的再経験の謂である。</p> <p>一九二〇年代前半、ハイデガーは歴史を「形式的告示」という方法論との関連において究明していた。この時期の諸論考を勘案するならば、形式的告示とは、遂行意味（＝＜私・今・ここ＞という状況の了解）へと我々を導く方法のことである。そしてその際、この遂行意味は或る具体的なものとして把握される。こうした＜私・今・ここ＞の具体的状況こそが、当該時期におけるハイデガーの所謂「歴史」である。</p> <p>形式的告示が遂行意味への指示を行いうるのは、＜存在者との拘いによる自己喪失の事態＞への転落を誘発する内実意味が空虚になること、従ってこうした転落傾向が克服されることによって可能になるものである。だがハイデガーの如上の歴史理解にとって重要であるのは、単に転落傾向の超克に留まることなく、この超克を基に、不可避の所与性である転落傾向を自覚的に経験し直すことである。それ故、ハイデガーの歴史理解を解明しようとする本論文にとっては、今述べたような所与性の再経験に関する彼の見解を詳らかにすることもまた重要な課題となる。</p> <p>以上の目的に鑑みて、本論文は以下の六章から構成されることになる。</p> <p>第一章では、フッサールの『論理学研究』における「本質的に機会的な表現(wesentlich okkasioneller Ausdruck)」（以下「機会的表現」と略記）の意味構造を究明する。これは遂行意味の概念史的起源を探る上で必須の考察である。フッサールは、機会的表現の語り手の経験においてはイデア的意味が確保されており、その都度の状況や文脈の参照は不要であると考える。他方で聞き手の経験の特質は、フッサールの見るところ、＜直観的状況の介在による一義性と多義性の二重性の経験＞にある。しかしながら本章ではフッサールの如上の見解に抗して、電話で通話する事例の分析を通して、機会的表現が適切に使用される為には、聞き手のみならず語り手もまた直観的状況への参照を必要とすることが主張される。</p> <p>第二章では、今述べた直観的状況が＜私・今・ここ＞という事実性のゼロ地点に相当するものであること、そして機会的表現における一義性と多義性の輻輳に対応する二重の構成契機が、こうした事実性のゼロ地点（ひいては遂行意味）においても見出されることを明らかにする。</p> <p>第三章においては講義録「宗教現象学入門」におけるハイデガーの時間理解の内実を闡明する。原始キリスト教的な生は、イエスの再臨を待望することで、その都度のカイロ</p>			

ス的な瞬間を遂行意味として経験する。これは又、有意義性という現実を無反省に経験する慣用的な遂行意味から死に曝された遂行意味への転換が果たされる事態でもある。遂行意味の二重性に鑑みるならば、遂行意味の如上の転換は、有意義性という所与的な現実をその偶然性に関して改めて経験し直すことを意味する。こうして原始キリスト教的生におけるカイロスの瞬間という時間の経験は、所与性の再経験に他ならないことが明らかとなる。

第四章は『存在と時間』において本来の実存の核心にある現象として提示される「先駆的決意性」の真義を同書の諸処の論述の読解を通して詳らかにせんとするものである。その結果、その真義とは「既解釈性 (Ausgelegtheit)」(日常の実存の自己解釈を予め嚮導・統制している当の解釈の下図) への批判的な回帰に他ならないことが示されることになる。

第五章の目的は『存在と時間』における「反復」としての歴史理解を審察することにある。その為にあらず、前章で述べられた先駆的決意性による既解釈性への還帰が、過去から伝来する既解釈性(例えば古代ギリシア以来の伝統的存在論)が続べている世人的な世界の再経験の謂であることが論じられる。その上で、反復が応答と無効宣告という互いに相反する二契機からなり、そしてそのようなものとして、この反復が、先駆的決意性という立脚点から伝統的存在論に対して無効宣告を行いつつも、そのような否定性を介することで却って当該の存在論に真に応答せんとする試みである所以が詳説される。

最終章(第六章)は、講義録「形而上学の根本諸概念」における歴史理解の解明に当てられる。まず、ハイデガーが自らの哲学の方法論と見做す「形式的告示」が「概念把握可能なものの次元の先行的な開け放ち」を必要とするものであり、そしてその際、「開け放ち」とは根本気分としての「深い退屈」のことであり、また「概念把握可能なもの」とはアリストテレスに由来する「として構造」であることが示される。次いでこの「として構造」が形式的告示により最終的には「世界企投」として規定される点が確認された後で、世界企投とは、深い退屈に支配されつつ、固有な実存(ないしは<私・今・ここ>)において日常的所与性へ回帰する本来の歴史性の優れた一形態であることが立証される。

(論文審査の結果の要旨)

申請者によれば、本論文の主な狙いは「ハイデガー哲学における歴史理解に焦点を当て、その意義を明らかにすること」である。

こうした問題設定においては通常、『存在と時間』における現存在の歴史性の議論や、その後の存在の歴史の所説が主題的に究明されることが多い。事実、ハイデガーの歴史論を巡る先行研究の大半は、この「歴史性」や「存在の歴史」を論究するものによって占められてきた。しかしながらこれに対し、申請者は『存在と時間』以前の時代（つまり初期）のハイデガーに特有な「歴史」概念の適用範囲を最大化して、この概念を彼の爾後の立場にも外挿して読み込む試みを敢行する。このように王道に代えて人跡疎らな寥々たる小径を（釈迦牟尼の所謂）「犀の角」の如く独り歩まんとする点が、卑見によれば、本論文の最大の特色である。

以上のような企図の下で執筆された本論文は（序章と結語を除けば）全六章からなる。以下、各章において取り分け刮目に値すると思しき点を挙げていくことにしたい。

旧師フッサールによるハイデガーへの思想的影響は如何なるものかという問題に関しては、これまでも様々な研究者が種々の仕方で論じてきた。本論文第一章もこの問題に取り組む試みの一つであるものの、とはいえ特筆すべきは、申請者がその際、他の多くの論者とは異なり、フッサールが『論理学研究』において行った「機会的表現」の分析を特に取り上げ、これを申請者独自の考察を基にして丹念に検討し直している点である。機会的表現とは、その指示対象の確定に際しては個々の状況の参照が必要になる表現の謂であり、したがって申請者の考察は、同じく文脈依存的な「指標詞(indexical)」をめぐる分析系言語哲学の議論とも通底するところがある。このように本章は、大陸哲学と分析哲学が交差する領域を扱った数少ない研究として貴重である。

前章の続篇として位置づけられている第二章では、前述の機会的表現の構造として析出される＜一義性と多義性の交錯＞が実のところ、初期ハイデガーの所謂「事実的生」を構成する三つの契機（内実意味・関係意味・遂行意味）にも反映されていること、そしてこの事実的生の一義性が当該の生の抹消可能性にこそ求められうることが主張される。つまりここでは、ハイデガーの説く事実的生をフッサールが言う機会的表現の実存的な受肉化として捉え直す見方が示されていると言ってよい。管見の限り、かかる見解は前代未聞であり、今日の現象学の研究に一石を投ずる意欲的な試みであることは疑いえない。

第三章は、初期ハイデガーのパウロ講義の読解に当てられている。申請者が見るところでは、その読解の要諦は、キリスト教徒の生の独自性は或る特異な瞬間（新約聖書に所謂「カイロス」）における当の生の「必然的偶然性」の自覚に存するというところに他ならない。卑見によれば、如上のハイデガー解釈は「偶然性の存在学的意義」を「視野の外に逸してしまっている」廉でハイデガーを批判する九鬼周造の次のような洞察とも一脈相通ずるものがある。「偶然性が偶然性として掴まれることによって極微の可能性が自覚される。可能性の自覚は必然性への発展を促す」。換言すれば一申請者自身はそのことには一切関説していないとはいえ一本章の議論は、九鬼の如上のハイデガー批判にも拘らず、両者の所説の異同を偶然性の観点から仔細に比較考量するハイデガー・九鬼研究の新機軸の可能性を胚胎しているのである。

第四章と第五章は、『存在と時間』における「先駆的決意性」と「歴史性」の議論を＜既解釈性（乃至は既存性）の批判的再経験の記述＞として解釈する試みである。

当該の両章では、ハイデガーの初期思想をそれに後続する前期のそれへと外挿し、あくまでも前者の延長線上にある限りにおいて（しかもその限りにおいてのみ）後者を理解せんとする前述の申請者独自の立場が旗幟鮮明になっている。そしてこれにより申請者は同時に又、先年の実存主義の退潮以来、過去の遺物として久しく等閑視され続けてきた『存在と時間』の人間学的読解の復権を企図していると言ってよい。

申請者のハイデガー解釈の独創性は、最終章（第六章）でも遺憾なく発揮されている。というのも本章では、通常は中期思想に分類されることが多い講義録「形而上学の根本諸概念」を敢えて初期ハイデガーの方法論的概念である「形式的告示」を基にして読み解いていくことが試みられているからである。

上来述べ来った如く、本論文には独自の創見が多々認められる一方で、解決せられるべき問題が残存していることも事実である。第一に、先述した「既解釈性の批判的再経験」は、『存在と時間』においては—この経験を「人間学」的に捉えようとする申請者の見解とは異なり—徹頭徹尾、同書の主目標たる「存在の意味への問い」の遂行の為にこそなされるべきもの（つまりあくまでも存在論的究明の一環）として考えられているのではないか。第二に、申請者によるハイデガーの初期哲学の「外挿」は「存在の歴史」を始めとする中期以降の彼の思想に関しても果たして可能であるのか。第三に、『存在と時間』以前・以後における「解釈学的状況」や「先行構造」等に関するハイデガーの考え方の変遷に鑑みるならば、こうした初期ハイデガーの「外挿」は（中期以降と言わずとも）彼の前期思想に対してすら問題があるのではないか。

以上のような難点が認められるとはいえ、如上の理由により、本論文は所期の水準を十分に満たすものとして評価せられうる。

よって、本論文を博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成三十年二月二十二日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第十四条第二項に該当するものと判断し、公表に際しては当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降